エドモントン便り

Tさんのこと

藤永　茂

Tさんは長い旅に出ている。十年ほども住みなれたエドモントンをあとにして、ロンドンからヨーロッパ、中近東、インド、東南アジアをたどり、ニュージーランドに及ぶ四か月の大旅行にTさんが出発したのは、去年の夏の暮れのことであった。

旅立ちの日のTさんは、よく着込んだバックスキンのジャンパーを手に持ち、ジーンズのズボンに白いTシャツのいでたちだったが、そのTシャツの胸には「I am Scientst」（私は科学者）、背中には「Scientist is Honest」（科学者は正直）と鮮やかにプリントしてあった。

Tさんの専門は有機化学で、アルバータ大学化学教室の一有力教授のリサーチ・アソシエイトという地位にあった。教授の総数が四十五名、日本人の若手研究員の数も一ダース以上という大世帯の教室だから、専門のかけはなれた私がTさんという人物をよく知るようになるまでには、かなりの年月がかかった。始めの頃は、彼が東大出身の優秀な若手であること、朝日新聞をアサシヒンブンと訛ること、人の世話を引受けるについては底抜けに親切であること、などを耳にしていた程度だった。

Tさんの親切さにまつわる伝説は、今も化学教室の若い日本人の間で語りつがれているらしい。先日も、バンクーバーで自動車事故をおこした化学教室の日本人夫妻を助けるために、Tさんがその日のうちにエドモントン・バンクーバー間を走破してかけつけた、という「伝説」を耳にはさんだ。その距離約一千キロ、いかに一心太助のようなTさんにしても、これは無理というものであろう。

しかし、その伝説のもとと思われる事件はあった。エドモントンから自動車で五百キロの所にカナディアン・ロッキーの有名な観光都市バンフがある。そのバンフからロッキー山脈をこえて百五十キロほど西北に進むと、ラジウム・ホットスプリングという温泉地に着く。夏のある日、化学教室にやって来て余り日もたたぬ若い日本人夫妻が、その温泉に向けて下って行く山道で、スピードを出しすぎてカーブを切りきれず、下の溪谷に転落してしまった。奇跡的に軽傷ですんだのはよかったが、異国の地理に不案内な上に言葉も不自由とあって、車や傷の処置に困惑してエドモントンのTさんの所に助けを求めた。電話を受けたTさんは、愛車のマスタング・コンバーティブルを駆って一気に六百キロ余りをつっ走り、その夫妻を窮境から救い出したのであった。

Tさんの親切は日本人だけでなく誰にでも及んだし、日常生活のトラブルに限られたのでもなかった。大学院学生や研究員たちが仕事のことで助けを求めに来ると、自分の研究時間が食いつぶされるのもいとわずに、実によく世話をみたのである。しかし、我々には、空気のように無償で得られるものについては、つい感謝することを忘れてしまう傾向がある。測定計器の使い方がわからなかったり、自分で苦労してしらべものをするのがうるさい時には、Tさんに聞けば大ていのことは片がつく。よろず、Tさんに頼むのが便利安直ということになった。有機合成の勘どころからアパート引越しの手伝いまで……

日本からエドモントンにやって来て、おっかなびっくり異境での生活を始めた頃、Tさんがただで持ち込んでくれた台所用品のあれこれを、エドモントンから引揚げる際には他人に売りつけて帰る人まで出てきた。そんなことがあった頃から、Tさんが少しづつ不機嫌な気むずかしい人間になり始めたように思われた。

四年ほどまえ、Tさんがアメリカの大会社ダウ・ケミカルにひょいと就職したことがある。化学者としての優秀さを高く買われてのことであったに間違いない。ところが一年もたたないうちに、せっかくのダウ・ケミカルをやめて、また元の薄給の職に戻って来てしまった。同僚の黒人研究員に対する会社の不当な取扱いに抗議して、二人でやめてしまったということらしかったが、Tさんはあまり詳しくは語らなかった。

旅に出る前のある日、私の部屋にふらりとやって来たTさんはこう云った。

「もう十分ながい間、節を守ったつもりです。もう、いやになりました。やめます。日本に帰ったら、今度は奴等のゲームのルールにしたがって、ばりばりやります」

Tさんは、東大の全共闘の生き残りのひとりである。正しいことは「正しい」、間違ったことは「間違っている」としか云えない人間が大人なら、Tさんは「子供」のままで三十五年を生きてきた。いま、彼は何の肩書もない一介の旅人としてアジア大陸の南部をたどって旅をしている。東京に帰ったとて具体的な就職の当てなどありはしない。東京でTさんは果たして「奴等のゲームのルール」にしたがってカッコよく生きて行くだろうか。

Tさんにはその変身ができるだろうか。エドモントン空港をたつ時のTシャツの文字を想い出すと、とても無理なように私には思われる。世の中には、保身に必要な限度をこえて、不正直な科学者が多すぎる。つねづね、そのことにあれほど腹をたてていたTさんが、その中の一人になり切れるとは、私にはどうしても思えないのである。

（アルバータ大学教授）